

# ケアと正義の視点からとらえる養護教諭の存在意義とその独自性

— 倫理学におけるケアと正義の対立を手がかりに —

山 梨 八重子

## What is the Significance of the Existence of the Yogo-Teacher and the Uniqueness of the Yogo-Teacher? :

Based on Discussions of the Ethics of Care and Justice

Yaeko YAMANASHI

(Received October 1, 2013)

In practice, Yogo-Teachers tend to have various conflicts with other teachers. The background to this appears to be the tendency of school education today not to accept individuality, and instead to emphasize rules. Therefore I will consider these conflicts from perspective of ethics, and suggest an ethical framework suitable to school education. Today's educational environment is characterized by discussion of the ethics of care and of justice. I believe that the conflicts faced by Yogo-Teachers are in conflicts between the ethics of care and the ethics of justice.

In this study, I examine a model that appropriately integrates care and justice to correct problems. Therefore, on the basis of a series of inquiries, I intend to mention the unique specialties of the Yogo-Teacher.

**Key words :** 養護教諭 ケアと正義 個別化と社会化の対立

### 1. はじめに

養護教諭の多くが、子どもの対応をめぐる一般教師との対立を経験している。養護教諭の抱える対立は、養護教諭がマイノリティーであることもあって、無力感やあきらめ、ひいては養護教諭としての自己評価を引き下げることにつながる。このような対立は、組織での力関係からそれまでに準じた結論となることが多く、子ども観や発達観ひいては教育観などの解釈の相違ととらえ、そこに帰着させる傾向にある。また養護教諭養成ではこの対立や葛藤を専門職としての養護教諭の未熟さにあるとし、その専門的能力の向上にその解消を求めてきた。このアプローチは既存の学校教育を前提としたものであり、その学校教育のあり方を問うことがなければ、養護教諭の専門性はその中で意味づけられ完結する危険性を孕む。

本論は、このような対立を倫理学上の視点から問い直し、学校教育における対立の解消や是正に寄与する両者のあり方を検討し、その過程を通して、養護教諭の存在意義や独自性をとらえなおすことを目的とする。

### 2. 養護教諭の抱える対立とその根源にあるもの — 個別化 / 個別性重視と社会化 / 普遍性重視の対立 —

学校教育の使命はその目的の実現にあり、その目的を端的に示せば、「一人一人の子どもの発達の実現」すなわち「個別化」と、「秩序ある社会の一員としての市民の形成」すなわち「社会化」で、そこには潜在的な対立がある。これまでこの相反する2つの目的の優位性をめぐる解釈の対立は、法律や教育政策などのレベルで表出している。

対立を生じる両者の違いを倫理的にとらえれば、社会化は「普遍性重視の立場」であり、個別化は「個別性重視の立場」となり、前者は正義の理論を基盤とし、後者はケアの理論を基盤として派生するものである。一般的にいわれる正義の理論は、西欧近代社会の道徳規範として位置づけられ、その秩序維持のための道徳的規範を内面化し、産業に適した人材育成が近代学校の社会的使命となった<sup>1,2</sup>。つまり学校教育は、近代的正義の実現を目的とした社会的装置として制度化されているといえよう。その結果今日の日本の学校教育には、個別性を重視する個別化の考えよりも、普遍性を重視する社会化の考えを優位とする風土が形成さ

れているといえる。

正義の理論では、一般性や普遍性から導かれる公平や平等、そして自律に重きをおいて道徳的倫理的判断を下すのに対し、ケアの理論では、個別性や文脈性を重視しその判断を下す点に特徴がある。その時前者は外部にある普遍的規範を適用させるのに対し、後者は自己内部の道徳的感覚に重きをおく。このように正義とケアは、倫理的にはそれぞれ異質で同一化できない対立的関係にあるととらえられ、その違いは人間観や社会と人間とのあり方のとらえ方にも表れる。

近年のケア理論の台頭は、正義の道徳的基盤を優位とする近代社会に対する異議申し立てで<sup>3</sup>、道徳的基盤の優位性を巡る論争を生じさせている。しかし両者とも人間にとって不可欠な道徳規範であることから、倫理学では両者を統合し、新たな包括的な道徳の枠組が求められている。

ケアと正義の倫理学上での優位性をめぐる議論を、学校教育に引き寄せてとらえてみよう。

まず養護教諭が個別化の立場、つまりケアの立場に立つといえるのかを検討してみる。養護教諭の対応は、子どもの苦痛・不安・気がかりに呼応し、子どものそれに応答する<sup>4</sup>もので、そこにはケアの原初があるのととらえられる。特に養護教諭が看護師から分化した職業で、傷病の手当ての対応を契機に導入されたこと、さらに近年子どもの発達保障の実現に絡む支援が注目されてきたことが、今日のケア理論とも重なる。このような養護教諭の実践を受けて、中安紀美子は子どもの存在それ自体をケアする存在として養護教諭をとらえ、「養護」の本質を子どもの存在をケアすることととらえている<sup>5</sup>。このように今日の養護教諭研究では、「養護」をつかさどる養護教諭の仕事の内実をケアとほぼ同一な概念ととらえるのが一般的である<sup>6,7</sup>。これらのことから、養護教諭の仕事がケアを基盤とするものあることから、一般教師と対比すれば、より個別性重視の立場にあるといえる。

一方学校教育はすでに普遍性重視の立場を基盤に形成されているため、一般教師はより正義を基盤とする立場に立つ傾向があるといえるだろう。その時、個別性を重視した判断は普遍性を重視した判断との間に齟齬を生じやすく、さらに学校教育が社会化を優位とするゆえに、個別化の視点からの判断や対応が普遍性を損ない脅かす場合、特に強い対立となると思われる。筆者はこのような構図が、養護教諭が一般教師との間で対立や葛藤を抱えやすくさせていると考える。

実際の学校教育は、普遍性重視の規律化された学校によってそれを内面化した子どもが、秩序ある社会の一員として社会に参加する資格をえるとするを疑わない。それゆえに普遍性重視の立場からの指導や対

応への異議申し立ては、学校教育だけでなく社会一般からの逸脱・撤退と見られるのである<sup>8</sup>。そのため個別性重視の立場はあくまでも傍流で、普遍性重視の学校/教師の要求に応えられない子どもの救済装置にとどまり、同様に養護教諭/保健室も学校/教師からは学校教育での救済装置と解釈され、養護教諭/保健室の存在意義のとらえ方が狭隘化する。

子どもの発達や自己実現を考えると、個別性重視の立場と普遍性重視の立場の対立がその実現を阻む危険があるのととらえると、教育現場での両者の二項対立の解消に向けた新たなあるべき関係の構築が要請されると考える。そこで、まず学校教育における普遍性重視の立場の限界性を検討する。

### 3. 学校教育での普遍性重視の方法の運用

#### 3.1. 学校教育での普遍性重視的方法的運用

##### 一正義の道徳的原理の適用による例外措置一

先に述べたように統治手段としての学校教育は、「社会化」を教育の目的の第一義とし、その実現のための制度および組織を形成し、普遍性重視の立場が優位に行きわたる学校/教師を作りだしてきた。そのため普遍性重視の立場による公平や平等の実現が、個別性や多様性の実現より説得力をもち受け入れられやすく、そこに組織の同調圧力が作用し<sup>9,10</sup>、普遍性重視の立場を主流とする組織風土が堅持されてきたと筆者は考える。そこでは、個別性重視の立場からの異議申し立ては学校教育の目的である社会化の実現を阻むものとみられ、暗黙のうちに排除され普遍性重視の立場は常に優位となる。

普遍性重視の立場がその優位性を保持してきたもう一つは、普遍性重視の立場の運用と適用方法があると考えられる。普遍性重視の立場の基盤となる正義の立場では、「等しきものは等しく同じに扱う」という公平・平等が重んじられる一方で、「等しくない」と認められた場合はそれに応じた異なった扱いを認める「正義の形式的原理」がある。この原理を行使することで、普遍性重視の立場は公平性を実現するものと受け止められてきたと考える。普遍性重視の立場で対応が困難な場合で「等しくない」と判断されれば、例外措置の適用が可能になる。例えば骨折をした子どもでの対応で、学校での活動場面で課せられた作業の軽減および免除などの措置がその例である。

学校教育はこの方法を活用し普遍性重視の立場の適用の幅を拡大し、一定程度の柔軟な対応をとることで、普遍性重視の立場を学校教育の基本的原理として破綻させることなく、その優位性を保ってきたと考える。

この手法は関係する当事者の要求を満たし、かつ当事者以外の多数の子ども達を納得させる根拠をもち、長期となる場合もあるが、一時的な不公平状態を、当事者を含むメンバーに納得させるものである。

例外措置の対象となる子どもは、普遍性重視の立場が要求することに応えられない子どもで、その意味では「逸脱」した子どもでもある。そのためにはその逸脱が誰もが「例外」と認める客観的な根拠を備えている必要がある。例えば医師の診断などのように公的に権威づけられたものが必要で、それによって正当性と妥当性を担保する。養護教諭/保健室はこの医学的理由による例外措置を行使し、授業の欠課や早退などについての学校/教師の承認を引き出してきたといえるだろう。

### 3.2. 例外措置という方法の問題性

しかしながら正義の形式的原理における例外措置という方法には三つの問題を指摘できるだろう。

その一つは、例外的措置の判断根拠に厳格な客観性を求める点である。しかしながら子どもの抱える問題は個別性や多様性が高く、後々の発達科学や医学研究によって初めて「問題」と認識されることも多い。例えば、さまざまな疾病や発達障害などで診断までにいたらない境界域の場合や、医学的にまだ解明されていない問題を抱え「逸脱を余儀なくされている」子どもは、それを満たすことができない。社会的に正当と認められなければ学校内の承認は得られにくく、当事者の抱える「問題」は問題とされず、その結果それは単にわがままな要求となる。このように見れば、例外措置の判断は時間的状況的な不確実性を含んでいるのである<sup>11</sup>。このような事例で生じる対立やジレンマに直面しているのが養護教諭であり、こうした問題は養護教諭と教師の対立にとどまらず、学校・教師と保護者や世間との対立を生じさせる。結果的にこのグレーゾーンの子どもの例外措置の対象から排除することは、彼らに対するケアの実現を阻む。これは普遍性重視の立場の限界性の一つとして指摘されよう。

二つ目の問題は、「例外措置」の範疇と見なされた子どもへの対応の質である。例外と判断された子どもは、手厚い対応をなされるというよりも、教師に積極的な対応を免除する理由となり、学校教育が関与する対象からも除外されるという構図が生じやすい<sup>12</sup>。例外措置は正義の論理の公平性を一定程度満たすが、個別性重視の立場から見れば、必ずしも子どもの発達の実現の要求を満たすものとはいえない。

三つ目の問題としては、個別性重視の立場の適用の限定化である。例外措置という方法の行使は、普遍性重視の立場に個別性重視の立場を組み込んだものとも

いえる。しかしその適用範囲は問題を抱える子どもに限定され、すべての子どもを個別性重視でとらえ、その発達の実現をめざすものではない。今日の発達論から見れば<sup>13,14</sup>、子どもが深刻な問題を表出させていないとしても、一人一人の子どもは発達過程でそれぞれにさまざまな不安を抱えている。しかしそれらが例外措置対象と見なされなければ、そのような子どもに個別性重視の立場からの対応は容認されない。しかしすべての子どもが発達への要求をもち、それに応じていくことが学校の使命とすれば、個別性重視の立場の適用範囲の限定化は打開されなければならない。このことから普遍性重視の立場の方法は発達の実現の点からもその限界を指摘できよう。

養護教諭の特質は、集団としての子ども一般ではなく、一人の具体的な子どもと出会い、その苦痛や苦悩に対応するケアにある。問題を抱える子どもの発達の実現を達成しようとすれば、必然的に個別性や多様性などの具体的な状況を踏まえる個別性重視の立場となる。誰かが異議申し立てをしない限り発達の実現は疎外されていくという思いから、養護教諭は子どもの「声なき声」の代弁者として異議を申し立てることが多くなり、この例外措置の適用の判断を含め、普遍性重視の立場に立つ一般教師との対立が生じやすい。このように子どもの発達の観点からみれば、学校教育の普遍性重視の立場が運用上の方法としてきた「例外措置」には限界があるといえよう。

では普遍性重視の立場が優位な現状にあって、個別性重視の立場が学校教育において正当性をもちうるのか問われる。そこで普遍的規範に対して批判的立場をとるケアの理論を、正義の理論との対立という観点から検討する。

### 4. 個別性重視の立場の基盤としてのケアの理論

「ケア」は世話や手入れなどの行為を表すものとして従来から使われてきた身近な言葉であるが、近年ケアは人間の存在にかかわる深い意味をもつ概念として議論されている。その意味を、高橋隆雄はケアが異なる二つの意味を含むことから次のように分け、ケアの今日概念を説明している<sup>15</sup>。

(A) 気がかり、心配、心の重荷

(B) 他者に幸福を与えること、献身、配慮

高橋によれば、この2つのケアは時代と文化を超えてあてはまり、今日のケアの理論は特に(B)の意味に注目しているという。またハイデガーが「関心(気遣い、憂慮)」としてのケアが、人間の存在論的レベルで人間を人間たらしめている根源的なものであり、



人間の態度や行動の基盤としてとらえていることを引き、近代以降倫理学の主流となった正義、公正性、普遍性、自律性を基盤とする倫理だけでは解決しえない状況が生じている現代においては、ハイデガーのこの指摘は重みをもち、ケアの概念をとらえなおす契機の一つとなっている<sup>16</sup>と高橋は指摘する。

ケアを倫理学のテーマとして俎上にあげたのは、メイヤロフ (Milton.Mayeroff) と言えるだろう。メイヤロフのケア論は、ケアを人間すべてが担う営みで、ケアリングを「最も深い意味において、その人の人格の成長と自己実現を援助することである」<sup>17</sup>とし、「他者の成長をケアリングする」とは、他者を「自己の延長」上にとらえ、他者が「成長したい欲求」をもっていると感じ、その実現のために自分が必要とされていると感じとることである<sup>18</sup>とする。つまりメイヤロフの提起するケアとは、人間のもつ人を援助したいという本性的欲求から生じ、他者の自己実現によりそい専心することによって応答する道徳的な営みであり、男女の性を越えた営みとなろう。しかしメイヤロフがケアを正義に對置するものととらえていない点で、以下に取り上げるギリガンやノディングスと異なる。

以下では、ケアとは何かについて、特に正義と對置するケア論を展開しているギリガン (Carol.Gilligan) とノディングス (Nel.Noddings) の論を取り上げ、ケアの概念を正義との対立から検討する。

#### 4.1. ギリガンのケア論—道徳規準の性差—

ギリガンのケア論<sup>19</sup>の特徴は、道徳性の発達心理学研究から導出された点にある。コールバーグによる道徳性の発達研究に対する反論から始まり、男性中心の道徳観を基準とする発達観自体を問題視した。ギリガンは女兒の道徳的判断や中絶をめぐる成人女性の葛藤や判断の分析から、道徳的判断の基準で重きをおくものが女性と男性で異なり、女性特有な道徳的基準があることを明らかにした。さらに道徳性に性差があるだけでなく、その発達の過程もまた女性特有であると実証的に明らかにし、両者の違いをもたらす要因に養育環境や社会環境の差が関与していると主張したのである。

男性が正義や公平性、普遍性などを道徳基準とするならば、女性の特有な道徳律やその基準は、他者を傷つけないことでそれを回避したいとの欲求が強くあるため、男性の道徳基準との間で葛藤を抱えざるを得ないという。その結果として自己犠牲をともないやすく、女性にとって不平等な社会や状況では、他者に従属的で責任回避する傾向があらわれやすい<sup>20</sup>と指摘する。

しかしこのような葛藤を抱えた女性は道徳的に成熟するにともない変容し、「権利」という概念によって

その「他者」に「自己」を含めることで、他者と同等な存在として自己を位置づけていく<sup>21</sup>。女性が自分に対しても他者同様に思いやりと心配りができるようになると、相互依存的な人間を正当なものととらえ、その相互依存関係が意味あるものと認識する。この認識は現実直面する問題の選択過程で、女性が陥りやすい自己犠牲など習慣的制約から解放されて確立されていくと、ギリガンはとらえている<sup>22</sup>。

ギリガンはこのような人間関係の文脈性に依存する女性の道徳原理を「ケアの倫理」とし、男性の普遍性を重視した近代の規範倫理としての「正義の倫理」(権利の倫理)にそれを對置する。さらにケアの倫理と正義の倫理を對比させ、ギリガンは次のようにいう。

ケアの倫理は共感と気配りからの理解に基盤をおき、誰でもが認める苦悩を見分けそれを緩和するという「責任」に関わる命令で、それをとおして公平性を実現する「責任の倫理」ともいえる。それに対して、正義の倫理(権利の倫理)は、自己と他者の権利を尊重することを基盤とし、自己の生命や自己達成の権利を干渉から守るための命令で、他者への不干渉を「義務」とするため、他者へのかかわりは消極的にならざるをえない<sup>23</sup>。

さらに成熟した男性の道徳的見解の研究で、ギリガンは男性でもケアの倫理的配慮が発現することから、この二つの倫理は人間の道徳的成熟段階では性差によらず統合されていく<sup>24</sup>ととらえていく。

ギリガンにしたがえば、ケアの倫理は人間関係での思いやりや心配りという女性的な視点から立ち上がるが、それを権利概念でとらえることによって、自他を含むよきあり方を公平に追求する倫理へと成熟していく。正義の倫理とケアの倫理は、男性女性それぞれの養育環境や社会環境、歴史文化的的要因が強く関与し、それがそれぞれの道徳やその基準の発達に違いをもたらす。自己を含む他者を傷つけるべきではないという道徳律が社会的かかわりにおいて発揮されるとき、人はケアする「責任」を感じとる存在となる。それによって思いやりの倫理つまりケアの倫理は公的な領域を射程に入れるものとなる。そこでは、ケアの倫理は正義の倫理によって補完され、正義の倫理が他者への配慮をその内を含む構図がとらえられる。以上のことからギリガンの論では、ケアの倫理は人として不可欠で、それらゆえに道徳的成熟の中で、最終的にケアと正義が統合される可能性を予見していると筆者はとらえる。

#### 4.2. ノディングスのケア論—正義を包摂するケア—

ノディングスのケア論の特徴であり、ギリガンのそれと異なるのは、意識としてのケア(配慮)と行為と

してのケアに注目し、ケアという営みの過程で生起する専心、受容、共感、注意深さ、了解、応答、さらにそこから生じる相互性や関係性をとらえている点であろう。またノディングスは、メイヤロフの「他者をケアすることは、彼を成長させること、彼を自己実現させる」というケアの定義に対し、ケアされる人よりもケアする人に焦点化していると批判的である<sup>25</sup>。そしてノディングスのケア論は、ケアの倫理がこれまでの規範倫理にとって代わる根源的倫理であるということ<sup>26</sup>を明確に打ち出している点が、メイヤロフやギリガンと異なり、それがケアの倫理と正義の倫理の対立論争の契機となった。

ノディングスは、ケアを当事者の個別な関係や私的領域に局限しているとするケアの閉鎖性への批判<sup>27</sup>に対して、ケアが公的領域である社会の基盤を支えている<sup>28</sup>ことを主張し、ケアが正義を包摂するものとしてその論を展開している。その反論の足がかりとして、ケアの独自性として「関係性」を打ち出し、ノディングスは「関係の倫理」としてのケア論を提起する。この「関係性」が、私的領域から公的領域へのケアの漸進的拡大を必然的に引き出すととらえる。

ノディングスは、ケアの私的領域から公的領域の拡大を立証する時、ケアを表す care-for と care-about の二つの関係に注目する<sup>29</sup>。care-for が face to face の関係の成立する直接的なものであるのに対して、care-about は直接ケアできない他者の要求を「何とかしよう」と気にかけることで、care-for をもとにして、他者へと我々をつなぎ公共世界に関心を向けさせるものとする。二つに共通するものは、ケアはケアする者とケアされる者との関係があって初めて生起するもので、「関係性」抜きにはありえないもので、それは face to face の関係のとどまらず、拡大するものとする。それを可能にするのが care-about である。care-about は我々の「正義感覚」(sense of justice) の基礎で、この care-about が care-for と正義をリンクし、care-for を実現維持しその価値を高めることに寄与する<sup>30</sup>とする。だから我々は直接他者を care-for できなくとも、最終的にはその人を care-about することで、ケアは単に私的領域にとどまらなるとノディングスは主張するのである<sup>31</sup>。

さらに子どもの養育の例から、この care-about の内にある正義感覚が不正義な社会においてもケアの実現を可能にしており、またそれが子ども達の政治的リベラリズムの基となる正義感覚の基礎であり、それを供給しているのがケアであるとし、ノディングスはケアの理論が正義に対して優位であるとする論の根拠とする。

この care-for と care-about の2つの関係のとらえ方

によって、一つは私的領域というケアの限局性を打開する契機がケアに内在していること、今ひとつは正義の源泉がケアの中に内在することが打ち出され、よって care-about はケアの閉鎖性の打開と正義をケアによって一元化する可能性を含む概念と解釈できる。つまり、ノディングスは care-about の内にある正義感覚が正義を包摂するケアの可能性を提起し、それをケアが社会における道徳的基盤に位置づく根拠とし、社会基盤の道徳としてケアが正義に対し優位に立つ妥当性を提起したといえる。

#### 4.3. ノディングスのケア論と徳倫理

ケアの理論について、徳倫理の一つとする考え方がある。これは先に取り上げたメイヤロフがケアの要素としてあげたものが、徳倫理と類似しているためにケアの倫理は徳倫理の一つと見なされる<sup>32</sup>からである。このような考えに対して、「関係性」あるいは相互行為(応答)をケアが含むことから、ケアの倫理が徳倫理に包摂されない独自なものであるとノディングスは主張する。

ノディングスは一方でケアのもつ要素が徳にかかわるとは認めつつも、ケアおよびケアリングを美德としてのみとらえることの問題性を指摘するのである<sup>33</sup>。というのは徳は個人的な特性で、仮にケアおよびケアリングを徳の一つとしたならば、ケアが成就しなかったときはケアした側の徳が低いという評価につながり、またケアが成就したときはそこに独善性が生まれる危険性があり、長期間の不均衡なケアおよびケアリングではその危険がさらに高まることから、ケアおよびケアリングを徳とすることに批判的なのである<sup>34</sup>。確かにケアする者の徳としてケアを評価すれば、ケアする人のケアからの撤退を困難にさせ、ケアする人の尊厳を傷つけることにもなるという指摘は妥当であろう。ノディングスは、ケアを徳倫理に位置づけることで生じるこのような問題を回避するために、「美德としてのケア」を排除しないものの、ケアの倫理を徳倫理と同一化することに異議を唱える。だからこそノディングスは、「自然のケア」と「倫理的ケア」の2つの在りようを置いたとも言えるだろう。

しかしながらノディングスがいう「正義感覚」と、いわゆる「一般的にいわれる正義」との関係についてノディングスは詳細な言及していないため、「一般的にいわれる正義」をケアの倫理が包摂しうるのかはさらに検討が必要であろう。さらに、不正義な状況で立ち上がる「美德」は確かに徳倫理としてとらえることが可能で、その点でノディングスのケアの倫理と徳倫理についての見解から、両者のあり方は議論の余地を残すだろう。



以上ケア論の検討から、ケアが人間の営みや生に不可欠なものであり、正義に並ぶうる可能性をもつとの予見がとらえられた。そこで次に、ケアと正義の対立とその統合論議から、両者の関係を検討してみる。

## 5. 倫理学でのケアの倫理と正義の倫理の対立とその統合の論議

ノディングスはケアを正義より優位とするが、多くの論者はそれに対して懐疑的である。それはケアと正義が同化できない異質性をもつととらえているからである。そこでケアの倫理と正義の倫理の対立および統合を論究した品川哲彦<sup>35</sup>に依拠して、それぞれの特徴を対比し概括する。

### 5.1. 異議申し立てとしてのケア

ケアの倫理では、人間を傷つきやすく生の危うさをもつた存在で固有で具体的な存在とし、専心や受容そして共感的理解など感情的関係性を重視し、個別のニーズの充足をその目的とする。ケアの源泉はケアの受動的体験や道徳感情から派生し、ケアする者とケアされる者は必ずしも対等ではない非対称の関係である。対象との関係は選択し契約する関係ではない所与の関係で<sup>36</sup>、ケアする者とケアされる者との間には互恵性がある。またケアは主に私的領域で行使され、その行使の判断は個々の人間の内にある道徳感覚を基準にする。これに対して正義の倫理では、人間を理性的で自律した存在として、個人の自律を尊重し、公平公正そして平等に扱うことを原理とし、個人および社会の間の契約関係を前提とする。その原理は主に公的領域で行使される。正義の倫理は個別的自己の存在を超えた普遍的道徳規範や理性から派生するものである。

このように見るとケアの倫理と正義の倫理は人間観、他者のとらえ方やかわり方などで異なることが明らかになる。さらにこの両者は品川にしたがえば、倫理的次元の基礎づけレベル、メタ倫理学レベル、規範レベルの三領域<sup>37</sup>で、いずれのレベルでも対立し、一方をもう一方に摂取するのは困難である<sup>38</sup>と品川はみる。以上のことから両者は異質であるだけでなく、相互に反駁的な視点をもっているといえよう。

さらにケアの正義に対する反駁的視点に関して、川本隆史はケア論を正義論への異議申し立てととらえたベイヤーの見解を取り上げる。その異議申し立てとは、ロールズの正義論の四つの想定に対してなされているとする<sup>39</sup>。その四つとは、

- ①自律中心的個人主義的想定、
- ②平等な者同士の人間関係という想定、

③関係を自由に選べるという想定、

④情動の望ましい形態を陶冶するのではなく、それを理性的にコントロールするという合理主義・主知主義的想定、

である。この四つの想定が正義論の根幹をなすものであることこそが、ケアの倫理が正義の倫理を揺るがすとする。さらにこの正義への異議申し立てというところから、川本隆史はもう一つの意味を付加させている<sup>40</sup>。

それは、フーコーの提示した近代社会のとらえ方とその市民像に対して、ケアの倫理がその市民像を覆し、社会と個人の関係に異議申し立てを迫り、その関係性を変える可能性を潜在させているとする見方である。このように、ケアと正義は異質性だけでなく反駁する点を内在させているととらえてよいであろう。

ケアと正義の倫理学上の異質性を踏まえ両者を統合するために、品川は両者の異質性を保持した新たな包括的道徳の構築が求められ、その鍵として、相互補完性をあげている。ケアの倫理と正義の倫理における相互補完は、それぞれの脆弱性（反駁点）を補完し合うことで、それぞれの道徳的成熟を高める。その証左として、正義の倫理はケアの倫理の異議申し立てをうけて、公的領域でのケアの実現のために社会福祉政策や福祉社会制度などを実現する。これは正義の領域が私的領域に進出しケアを公的領域として接収する領域の拡大化である。一方ケアが正義の領域に拡大することをケアの観点から見れば、偏ったケアの負担の是正やケアの負担の公平性の確保となり、公的領域のケアの限界性を引き下げる可能性もある。その結果ケアの公的領域への進出は、公的領域の関係のこれまでのありようを変え、新しい関係性を構築する可能性をもたらす。このように相互補完による統合論は、ケアと正義それぞれの倫理の脆弱性を意識化させ、それを克服することにつながると思われる。

ただし品川はこのような正義の拡大化は、等しからざる者が「見かけの平等を達成するように<上昇>させられ」てしまい、公的領域でのケアの倫理の実現がなされたとしても、両者の実質的な違いを看過する危険がある<sup>41</sup>と指摘している点は現実に十分起こりうるもので、形式的正義の実現が我々の意識を歪め、ケアの実現が阻害されることが懸念される。その意味で正義を基盤とする統合論の陥穽といえるだろう。

### 5.2. 学校教育におけるケアの倫理と正義の倫理の統合モデルの検討

ケアと正義は異質性をもち互いに反駁する倫理であるが、学校教育ではその目的からケアの倫理と正義の倫理は双方ともに不可欠である。そこで両者の統合の

あり方をさらに模索してみよう。

葛生栄二郎は両者の統合のモデルを、「正義一元論」「ケア一元論」「ケア—正義並存論」「ケア—正義統合論」の四つに分類する<sup>42</sup>。

「正義一元論」とは、ケアが正義に包摂されるという立場をとり、それによってケアの対象が「万人」に拡大しケアが普遍性を有し、家族のような身近な対象も普遍的存在として尊重すべきものととらえられる。不完全義務と完全義務の観点からは、ケアなき正義は許容されるが、正義なきケアは許容されないとする<sup>43</sup>。それに対し「ケア一元論」とは、正義の倫理はケアの倫理に包摂されるもので、正義の倫理に対してケアの倫理を優位とする。それはケアが人間の生命や安全に不可欠な営みであり、さらにノディングスの提起にみられるように、正義を担う子どもはケアをとおして正義の感覚が育成されていることからである。だから正義なきケアは成立しても、ケアなき正義は成立しないとする立場である。

「ケア—正義並存論」は、ケアと正義は常に並存しているもので、道徳的推論の実際に近く、個々のケースに応じて両者の倫理的推論を使い分ける。多くの場合は私的領域と公的領域という場による使い分けが一般的であり、この領域二元論は一般的に公的領域が私的領域より優位と価値づけられる。そのため私的領域が公的領域を補完するという考えを正当化し、さらに私的領域では正義が実現されないことを容認することにもつながる。その点がケアの正当な評価を引き下げるとの批判はぬぐえない。それに対して「ケア—正義統合論」は、両者はどちらか一方に還元されるものではなく、二元的に存在するべきものという立場に立ち、一定の原理によって両者は統合されるべきだという考えで、その統合のありかたにはさまざまなものがある。

この四つの統合パターンを、学校教育の視点から検討してみると、正義一元論やケア一元論は先に見たように、倫理的次元のそれぞれのレベルのいずれでも対立することから、倫理学上その成立は難しいと見てよいだろう。またケア—正義並存論は、道德判断の実際レベルではなじみやすいが、実際の場面でどちらを適用させるかという点での確定は難しい。さらに公的私的という領域二元論に陥りやすい点があり、子どもの特質から領域を公的私的と二元論でとらえることは適切でないと考える。

このことから本論文ではケア—正義統合論に焦点を当て検討を進めることにする。さらに前述したように、ケアの倫理と正義の倫理の統合では、どちらか一方を他方が摂取する構図は成立しないことから、ケア—正義統合論は、最終的にケアの倫理と正義の倫理を統合した新たな包括的道德の構築が求められる<sup>44</sup>。そこで

筆者は品川が指摘するように、相互補完による統合による立場をとることにする。

### 5.3. 相互補完のあり方をめぐって

#### —編み合わせによる統合—

ケアと正義の統合における相互補完のあり方については、さまざまな考えが提起されている。ここでは相互補完という観点から、品川が検討したクレメント（Grace.Clement）そしてヘルド（Virginia.Held）の論を取り上げ概括する<sup>45</sup>。

クレメントは、基礎づけレベルによる相補的基礎づけが成立するためには、一方の倫理が他方の倫理にとって道徳的に適切であるための条件でなければならないとする。そしてケアの倫理と正義の倫理の両方に習熟していることが成熟に通じるならば、正義を満たさないケア、ケアを満たさない正義のいずれも正当化できないとし、そこにこそ相補的關係が求められるとする。たとえば正義を実現するためには、それを担う子どもの育成でケアが不可欠である。一方ケア関係の継続の判断は、ケアする側の自律によらなければならないため、ケアには最低限の正義が不可欠である。このように両者が現実成立するための条件を、互いが補完している点をあげ、両者の基礎づけレベルでの相補による統合の妥当性を主張する<sup>46</sup>。

しかし品川は、この発生論的ないし因果論的な観点に対して、正義の感覚を獲得するために、「正義に適った家族」による子どもの育成が前提となり、ケアはそれ自身とは異なる正義の原理を導入せざるをえなくなるとする。もし実現すべき正義を想定したケアが子どもを育成するならば、ケアは正義の原理に取り込まれたことになり、ケアと正義の相補関係を証明することにはならないとすると批判を示す<sup>47</sup>。

一方ヘルドは、四つの観点から正義に対してケアの優位性を主張する。その一つは、我々が領域に関係なく適宜ケアと正義を組み合わせ使い、両者の中間的な解釈をしていることが多いが<sup>48</sup>、特に何らかの判断をしなければならないとき、生命と健康に関わる医療、環境、子育て、教育、文化などは、ケアの優先性が高い領域があること、二つ目に経済や市場などの公的領域の社会的活動などのあらゆる社会活動が、ケアに支えられた人間によってなされる営みである以上、ケア抜きに成立できないから、何らかの社会活動は間接的にはケアによって支えられていること<sup>49</sup>、三つめに、ケアが人間の存在や生命に密接にかかわりかつ正義に基づく社会関係の実現の前提には、権利や権原ではなく、ケアされたという普遍的経験であるケア関係がなければならないこと、四つ目に自律した人間として認められる前提には、他者からの関心や存在の尊厳性へ



の承認が不可欠で、それをもたらしものもケアであることをあげる。ヘルドはケアと正義の領域二元論に対しては、ケアを基盤とする領域一元論の立場をとり、人間社会のあらゆる領域でケアが前提であり基盤であるとする立場から、ケアが正義の存立を基礎づける。

しかしケアと権利や正義が争点となると、それをケアが扱うことはできないということから、両者ともに不可欠なもので相補的な関係にあるとヘルドはする<sup>50</sup>。このことから、ケアなき正義は成立しないとの立場と領域一元論をとるヘルドは、両者を重層関係ではなく、ケアを「地」とし正義を「図」とするような包括的な道徳を提起し、ケアと正義の異質性をふまえ、両者の統合モデルとして「編み合わせ」(enmeshment)論を提起する。

ただしこの編み合わせ論で、ヘルドはケアと正義の両者の「道徳としての価値」は同等であるとする。それは両者が人間の生命維持や生活上で必要不可欠でかつ相互に絡みあって人間の存在を支えているからである。家庭での不公平や虐待などの問題はケアの脆弱性から生じており、ケアの倫理による解決は困難である。そのとき問題の防止や解決に正義が介入せざるをえず、すべての問題をケアの倫理で解決することはできない<sup>51</sup>。また私的領域での養育や健康管理などのケアが今日公的領域でも重要な政策であるが、公的領域の福祉施策がすべてのケアを満たすことができない限界もあげる。例えば子どもは心的ケアを含むすべてに答えることを要求するが、それは正義の認める最小限のケアを超えており、一律的な公平性を重視する正義からの福祉政策では、特定な人への必要なケアは実現しないことをあげる<sup>52</sup>。これらが両者の道徳的価値は同等ととらえる根拠である。

しかし両者の道徳的価値の同等性を認めながらも、その現実的な両者の在りようを踏まえるとき、ケアの倫理と正義の倫理の優位づけに関しては、ケアの倫理の対象や範囲が正義の範疇を超えたものであることから、ケアが最も基本的な道徳価値である。それがヘルドが編み合わせ論でケアを「地」とする理由である<sup>53</sup>。それに加えて原初の人と人の結びつきの発生論をヘルドは根拠にあげる。ヘルドはケアなしでは公的権利関係は成立しないが、ケアはケアの中で正義の実現を要求し、その実現を図ることができることから、ケアは正義なしでも可能であるとする<sup>54</sup>。

このことからケアには基礎的な道徳的価値があるだけでなく、正義を含みうる包括的道徳的価値があるとする。ヘルドにしたがえば、ケアの倫理は包括的道徳的価値をもち、それゆえに正義をも含む。この「ケアは正義なしでも可能である」という点は、ノディングスのいう「不正義の社会でもケアがなされて

いる」という指摘を想起させ、同時に徳倫理とケアの関係をとどのようにとらえるかという問題が浮かび上がる。この編み合わせに対して、品川はギリガンのケアの反転図形の比喩が盛り込まれ<sup>55</sup>、かつケアと正義の優先すべき領域の画定を明確にしている点を評価し、現時点ではこの編み合わせによる相互補完の統合を一つの到達点とする<sup>56</sup>。

学校教育でのケアと正義の統合のあり方を考える上で、ケアと正義の道徳的価値を同等とおきつつも、ケアを優位に置き基盤とする点、さらにケアが正義を包括しうる可能性を示している点から、学校教育の実際に照らし合わせると、ヘルドの編み合わせによる統合モデルは示唆に富むと筆者は考える。

## 6. ケアのかかわり中心の立場からの統合とその補完

ヘルドの編み合わせ論は「双方のもつ統一しがたい固有性と異質性」を保持しつつ、単なる重層的構造を超える相互補完性を提起したものといえるが、しかしながらその相互補完性を現実的レベルで、具体的にイメージすることは困難であるといえるだろう。このようにヘルドの編み合わせによる統合論に対し、その相互補完の具体性を示したものとして、高橋隆雄の「ケアのかかわり中心の立場」がある。

高橋は生命倫理および環境倫理を考えていく際、これまでの正義の倫理では限界があると指摘し、生命倫理および環境倫理の前提となる道徳原理として、ケアの本質である「傷つきやすい他者からの呼びかけに共感と熟慮をもって応答する」という「ケア中心の倫理」に基づくモデルを想定する。その際ケアを中心とする倫理は道徳感情を中核とする倫理であるためにケアする人の独善性が生じやすいことから、その脆弱性を権利概念によって補完する「ケアのかかわりを中心とする立場」(以下「ケアのかかわり中心の立場」とする。)を提唱している<sup>57</sup>。

この立場は、ケアの倫理と正義の倫理の双方が組み込まれた統合モデルと見ることができ、高橋の論はケアの脆弱性と妥当性を担保する手立てとして、ケアの権利概念による補完、さらにケアする者とケアされる者との「よき関係の形成・維持」という関係性の実現、それに加えてそのための「自己評価」という手続きを組み入れている点に特徴があり、より具体的な編み合わせを提示しているといえよう。そこで高橋のこの論を、権利概念による補完と「よき関係の形成・維持」の二つの観点から検討していく。

なおここでいう「よき関係」とは、関係当事者の間で支配や無視、抑圧そして搾取がなく、かつ当事者双



方がケアされる者の要求の充足によって、双方に充実感をもたらすそのような関係である。

### 6.1. ケア中心の倫理の優位性と権利による

#### ケアの補完の有効性

高橋の「ケア的かかわり中心の立場」の提唱の前提には、正義の限界への指摘がある。ではその正義の限界とは何か。

生命倫理の対象となるヒト胚や胎児などそして環境倫理の対象である自然や動植物は、人格としての人とのコミュニケーションが不可能であるという問題がある。双方の倫理での論議で、それらの道徳的位置をどのように考えるかが論点の一つであるが、そのときそれを権利概念でとらえることに限界がある<sup>58</sup>。それが高橋のいう正義の限界である。生命倫理と環境倫理は原理レベルで乖離しているものの、その対象の特性を権利概念でとらえると、いずれも権利の対象から排除されてしまいがちであるという共通点がある。そこでこのように権利論で排除されるそれらの対象を「ケア的かかわり中心の立場」でとらえると、道徳的配慮の対象からの排除を回避でき、ケアの倫理の特性から道徳的配慮の対象として包摂することが可能で、特にその対象の権利のとらえ方が論争となっている場合、権利という概念を中心におく権利主体の考え方よりも、対象に対する我々の道徳的感覚や直感、思いを重視するケアを前提とする方が現実的で实际的であることから、権利（正義）中心よりもケア中心の倫理の方が適切であると高橋は主張する。

高橋はケアの優先性を前提とするこのケア中心の立場に立つことで、権利概念によってケアが補完され、同時にこの補完がケアの妥当性の判断基準となり、それによってケアに内在する脆弱性を回避することにつながると説明する。ケアは正義のような普遍的一般的な原理に基づいて行われるものと異なり、ケアする側の感性や感覚に基づく個々の道徳的直感が源泉である。しかしこの道徳的直感や道徳感情がケアする側の恣意性や支配性をもたらし、ケアされる側の尊厳性や権利の侵害を孕む。そのため結果的にケアは善としての可能性を持ちながらも、「悪しきケア」となる可能性がある。このようなケアの脆弱性に対して、高橋は権利による補完を提起するのである。悪しきケアか否かの判断は、ケアの実践の中で培われた直感によって気づくことができ、それによってケアの逸脱を判断する。その直感とは、一般的意志や正義の感覚というケアする者の道徳的直感や道徳感情である。このケアの逸脱をくい止める具体的手段としては、権利にふさわしい対象であれば権利概念が考えられるが、他方権利を付与しがたい場合では、ケアする者の側による「不断の

自己評価」を想定し、それが権利概念に代わってケアの脆弱性を回避する手続きとして機能するととらえる。

教育領域のような権利概念にふさわしい子どもを対象とするケアの場合でも、子どもの権利の特性やその権利をめぐる論議を踏まえれば、子どもの権利は社会的には脆弱で侵害されやすいといえる。それを未然に防ぐ上でも、ケアする者の側による「不断の自己評価」をおくことによって、子どもに対するケアの脆弱性の補完は担保されと考えられる。ケア中心の立場では、教師の側の不断の自己評価がそのケアの妥当性を担保し、ケアの質を高めることにつながると筆者はとらえる。この教師の不断の自己評価の結果として表出されたものが、養護教諭の「異議申し立て」であると解釈できるだろう。

### 6.2. ケアの基盤としてのよき関係と正義の補完の可能性

「ケア中心のかかわり」で次に注目すべき点は、「よき関係の形成・維持」である。ケアによって他者と相互につながりあうことは、ケアされる者にとって善といえる。このときケアがもたらす善が、他者への善行に限定されるものにとどまらず、ケアする者の自己実現などの利得にもつながるとするならば、ケアという営みによって両者が利得を得る互惠の関係となり、「よき関係」となる<sup>59</sup>。このようにとらえるならば、ケアという営みの特質である「互惠性」が善となる。この互惠性は、ケアする側とケアされる側との間の共感・熟慮そして応答によってもたらされ、それによってよき関係が成立する。つまりケアでは「よき関係の形成・維持」が目的であり、同時にその判断の基盤となり、このような関係が形成・維持されるケアは善きケアである。この「よき関係の形成・維持」の判断が、道徳的直観によってなされるのである。

ケアの当事者間でのよき関係の判断は、当事者間の権利とそれらの権利の優先性を手がかりに、対話による合意形成の過程を通してなされ、それが悪しきケアを回避する<sup>60</sup>。ただし通常の対話が不可能で、こうした合意形成が成立しない又はできない場合、補完としての権利に代わるものとして、高橋はケアする者の「不断の自己評価」をおくのである。高橋にしたがえば、「自己評価」とは対話できない相手の「声なき声」、「沈黙の声」との対話をとおして、自らの姿勢や態度を点検する作業であり、対象のあり方に自らを合わせて探求する作業の過程で、自己評価する者自身の変容を生み出すという点で、ケア中心の倫理の一つの核である<sup>61</sup>と同時に、ケアにおけるよき関係の形成・維持の成立が自己評価の基準の一つである。このように考えるとよきケアであるか否かの判断は、権利の侵害や対立の有無そしてその基礎にある「よき関係の形

成・維持」の有無にある。

加えてこの「よき関係の形成・維持」は、正義を補完する可能性をもつと筆者は考える。権利を有するものは、自己の権利の実現をめざすことから自己中心的になりやすく、権利が競合したとき自他を平等に扱う公平の論理によってそれを解決しようとするものの、ギリガンが指摘<sup>62</sup>したように当事者間の関係の悪化を招き、人間関係の断裂や分断は連帯性や公共性の喪失という危険性を孕む。この危険性をケアの特質である「よき関係の形成と維持」が補完する可能性があるとして筆者は解釈するからである。

### 6.3. ネットワークによるケアの実現と正義の補完

実際の学校教育を想定すると、ケアされる者の要求は、ケアする者の行為や対応だけで実現するものではなく、ほとんどが周辺他者を抜きには実現できない<sup>63</sup>のは事実である。ここでいう「周辺他者」とは、ケアする者とケアされる者との二人称的な閉鎖した関係の外にあり、かつケアの実現のために除外できない他者である。

ケアの実現を遂行しようとするれば、この周辺他者との関係が浮かび上がる。その関係とは、ケアの対象が抱えた問題を周辺他者もまたケアする者としてそれを受容していく関係である。そのためにケアされる者と周辺他者との間をつなぐ存在が要請され、それを担うのがそのケアの原始となったケアする者である。この媒介者がケアされる者と周辺他者をつなぐならば、ケアによるネットワークが構築される。その際このネットワークの一つ一つのつながりにおいても、その当事者間の「よき関係」が要請され、それは累進的に拡大する。つまりケアのネットワークとは、「よき関係」を媒介としたネットワークといえる。ということはこのネットワークは、権利を尊重しあう個人と個人の「よき関係」によって構成され成立することから、ここでは自他の分断ではなく、連帯性や公共性が必然的に求められる。これは先に述べたような自他を分断する傾向にある正義の脆弱性を、一層補完する作用を果たすと筆者は考える。

この「よき関係」を実現するためには、当事者間の合意形成が不可欠である。ヘーゲル哲学に依拠すれば、合意形成とは自己と他者の相互承認が不可欠で、自己は必然的に自己中心から脱皮した自己、つまり「脱自己中心的自己」となることが要請される<sup>64,65,66</sup>。このようにとらえると、「よき関係」を媒介とするネットワークは、連帯性や公共性そして脱自己中心性をふくむことになる。この観点に立てば、権利（正義）において生じやすい自己中心性や連帯性および公共性の喪失という弱点を、ケアのネットワークが補完すること

が可能であろう。言い換えれば「よき関係の形成・維持」によって構築されたケアのネットワークは、それが内在する連帯性や公共性そして脱自己中心性によって、権利（正義）の脆弱さを補完するといえる。

ただしケアによる権利の補完に限界が全くないわけではない。高橋は、「権利中心の社会で生じがちな人間の孤立や自己中心性という弊害をケアでとらえたとしても、民主制の基本である国政の主体者としての自覚の欠如は、ケアによって補完できるとはいえない」し、「補完すべき権利やケア自体が逸脱し停滞している場合、徳によって支えられるよき関係が倫理的停滞を打開する鍵である」と指摘する<sup>67</sup>。これは権利もケアも停滞して、ケアのネットワークも十分に機能しない状況では、徳に頼らざるを得ないということである。その意味ではこのケア中心の統合モデルは脆弱性を抱える。しかし徳倫理が人びとに問題を気づかせ、揺さぶる力を持っているならば、それを契機にケアと正義の倫理的停滞を徐々に打開していく可能性を想定できる。このように考えれば「ケア的かかわり中心の立場」は、ケアと正義の統合モデルとして、一定の有効性をもつと筆者は考える。

以上これまでの検討から、個別性重視の立場の基盤であるケアを社会の成立基盤であるとし、さらにケアと正義の相互補完を含む「ケア的かかわり中心の立場」からのケアのネットワークを想定した統合モデルは、ケアと正義の道徳的価値の同等性を担保する点、そしてその両者の補完関係によって統合しうる倫理的な根拠を持つ点で、学校教育での倫理的枠組として有効であると考えられる。

## 7. まとめ

本論では、ケアの立場にたつ養護教諭が抱える対立は、ケアと正義の対立から派生し、その解消にあたって両者のあり方の枠組みの捉え直しが求められると問題を設定した。それを受けての一連の検討の結果、普遍性重視の基盤である「正義」と個別性重視の基盤である「ケア」の両者は、その道徳的価値と特質から人間の存在に不可欠なものであるが、倫理的レベルでは異質である。その異質性を踏まえ両者を統合するならば、両者の統合モデルとして、ケアを基盤として正義とケアの相互補完による権利による「ケア的かかわり中心の立場」およびそれにもとづくケアのネットワークが、両者のあるべき関係をとらえる倫理的枠組として有効であり、同時に学校教育でのケアと正義の枠組のあり方をとらえなおす上でも有効であるとの結論に至った。

この結論を踏まえ、正義を基盤とする傾向にある学校教育において、ケアを担う養護教諭が、このケア中心のかかわりの立場を実現していく役割を担うとすれば、その独自性はよき関係の形成・維持と不断の自己評価を包含したケアのネットワークの構築を企てる点にあると予見する。

なお、本論文は、拙著「学校教育におけるケア的かかわりの再考－ケアと正義の視点からの養護教諭の存在意義－」（2013. 熊本大学リポジトリ）第四章に加筆修正したものである。

### 引用および参考文献

- <sup>1</sup> 柳 治男（2003）, 「学校という組織」 森重雄・田中智志編著, 「＜近代教育＞の社会理論」, 勁草書房, pp.93-127.
- <sup>2</sup> 長谷川裕（1993）, 「学校の規律・訓練」, 『学校（現代社会と教育③）』, 大月書店, pp.124-150.
- <sup>3</sup> N.Noddings（1984）, 立山善康他訳（1997）, 『ケアリング－倫理と道徳の教育－女性の観点から』（晃洋書房）および佐藤学他訳（2007）, 『学校におけるケアの挑戦』（ゆみる出版）などを参照されたい.
- <sup>4</sup> 山梨八重子（2010）, 「ケアとして寄りそうことの意味－その応答性と呼応性－」, 『日本教育保健学会第8回（2010）講演集』, pp.70-71.
- <sup>5</sup> 中安紀美子（2005）, 「養護教諭の＜養護＞概念をめぐって－子ども観・発達観・共同論の視点から－」, 『第52回日本学校保健学会』, Vol.47.suupl, pp.82-83.  
中安紀美子（2003）, 「養護教諭の＜養護＞とは何か」, 日本教育保健研究会年報, 第10号, pp.47-54.
- <sup>6</sup> 藤田和也（2007）, 「養護教諭－今日の学校における存在と役割－」, 『教育』, 国土社, 三月号, pp.4-9.  
藤田和也（2008）, 『養護教諭が担う「教育」とは何か』, 農文協, pp.33-35.
- <sup>7</sup> 堀内久美子（2008）, 「養護・看護から見たケア」, 井形昭弘編著, 『ヒューマンケアを考える』, ミネルヴァ書房, pp.60-63.
- <sup>8</sup> 石飛和彦（2006）, 「学校問題と逸脱－ポスト学校化社会と管理社会論－」, 稲垣恭子編, 『子ども・学校・社会－教育と文化の社会学－』, 世界思想社, pp.192-213.
- <sup>9</sup> Robert King Merton（1957）, 森東吾・森好夫他訳, 『社会理論と社会構造』, みすず書房, pp.181-184.
- <sup>10</sup> 高橋靖直（2011）, 『学校制度と社会』, 玉川大学出版部, pp.82-87.
- <sup>11</sup> 不登校に対する教育行政の対応の変化もその例である.
- <sup>12</sup> この例の一つとして, 就学免除があげられる.
- <sup>13</sup> 保坂亨（2010）, 『いま, 思春期を問い直す－グレイゾーンにたつ子どもたち－』, 東京大学出版.
- <sup>14</sup> 滝川一廣（1996）, 「脱学校のこどもたち」, 『子どもと

教育の社会学』, 岩波書店, pp.39-56.

- <sup>15</sup> 高橋隆雄（2008）, 『生命・環境・ケア－日本の生命倫理の可能性－』, 九州大学出版会, pp.9-11.
- <sup>16</sup> 高橋隆雄（2008）, pp.9-11.
- <sup>17</sup> メイヤロフ（1993）, 『ケアの本質－生きることの意味－』, 田村真・向野宣之訳, ゆみる出版, p.13.
- <sup>18</sup> メイヤロフ（1993）, pp.20-21.
- <sup>19</sup> ギリガン（1986）, 岩尾寿美子監訳, 『もう一つの声－男女の道徳観の違いと女子のアイデンティティ－』, 川島書店, pp.8-32.
- <sup>20</sup> ギリガン（1986）, pp.112-122.
- <sup>21</sup> ギリガン（1986）, p.304.
- <sup>22</sup> ギリガン（1986）, p.166.
- <sup>23</sup> ギリガン（1986）, p.176, p.179.
- <sup>24</sup> ギリガン（1986）, pp.268-305.
- <sup>25</sup> Nel.Noddings（2002）, *Starting at Home*, University of California Press, p.12.
- <sup>26</sup> ノディングスは以下にあげた著作で, これまで出された批判に対して反論を加える形でケア／ケアリング論を展開している. ノディングス（1984）, 立山善康ほか訳（1997）, 『ケアリング－倫理と道徳の教育－女性の観点から』, 晃洋書房.  
ノディングス（1992）, 佐藤学他訳（2007）, 『学校におけるケアの挑戦』, ゆみる出版.  
Nel.Noddings（1999）, *Justice and Caring, The Search for Common Ground in Education*, Teachers College Press.  
Nel.Noddings（2002）, *Starting at Home*, University of California Press.
- <sup>27</sup> このようなケア論のとらえ方をしている考えの一つとして, ジェームズ・レイチェルズ『現実を見つめる道徳哲学』（晃洋書房, 2003）をあげることができる.
- <sup>28</sup> ノディングス（1992）, p.331.  
村田美穂はこれを「社会政策の基盤としてのケアリング」と表現する. 村田美穂（2006）, 「ノディングスのケアリング論」, 中野啓明・伊藤博美・立山善康編著『ケアリングの現在－倫理・教育・看護・福祉の境界を越えて－』, 晃洋書房, p.101.
- <sup>29</sup> 安井絢子（2010）, 「ケアとは何か－メイヤロフ, ギリガン, ノディングスにとってのケア－」, 『哲学論叢』（第37号, pp.126-127.）. 安井絢子はノディングスがこのような care-about に言及するのは, 「ケアリングという概念のみによる社会政策論の限界」に気づき, 「ケアリングに基づく環境づくりのための道具としての正義とともに, ＜気にかける＞ことが重要な意味をもつ」と考えるに至ったからであるとする.
- <sup>30</sup> Nel.Noddings（2002）, pp.22-23.
- <sup>31</sup> Nel.Noddings（2002）, pp.22-25, p.31.
- <sup>32</sup> 田中朋弘（2012）, 『文脈としての規範倫理学』, ナカニヤ出版, pp.237-240.
- <sup>33</sup> ノディングス（1992）, p.47.
- <sup>34</sup> ノディングス（1992）, p.47, p.53.
- <sup>35</sup> ケアと正義に関する論を分析している品川の著作を主



に参考にした。

品川哲彦 (2009), 『正義と境を接するもの－責任という原理とケアの倫理－』, ナカニシヤ出版。

<sup>36</sup> 中岡成文 (1999), 「理解と援助のパラドックス」, 『臨床哲学』, pp.12-14.

中岡はヘーゲルが他者との承認に関わらせてケア論の非対称性や依存性を上げている。

<sup>37</sup> ここでは児玉聡の定義に依拠した。

児玉 聡 (2007), 「規範倫理学」, 赤林朗編, 『入門 / 医療倫理Ⅱ』, 勁草書房, pp.9-11.

<sup>38</sup> 品川哲彦 (2009), 『正義と境を接するもの－責任という原理とケアの倫理－』, ナカニシヤ出版, pp.147-149.

<sup>39</sup> 川本隆史 (1995), 『現代倫理学の冒険』, 創文社, pp.72-73.

<sup>40</sup> 川本隆史 (1995), pp.206-211.

<sup>41</sup> 品川哲彦 (2009), p.161.

<sup>42</sup> 葛生栄二郎 (2011), 『ケアと尊厳の倫理』, 法律文化社, pp.148-158.

<sup>43</sup> 品川哲彦 (2009), 『正義と境を接するもの－責任という原理とケアの倫理－』, ナカニシヤ出版, pp.154-156.

<sup>44</sup> ベイヤーもその一人で, ケアの倫理から「数多くの声」からなる多声音楽形式の倫理学構築がケアと正義の統合につながる可能性を提起している。この立場に立つ論者は他にこのような考えを示す論者としてヘックマン (Susan J.Hekman) がいる。葛生栄二郎 (2011), pp.150-151.

<sup>45</sup> 品川哲彦 (2009), pp.219-240.

<sup>46</sup> 品川哲彦 (2009), pp.224-226.

<sup>47</sup> 品川哲彦 (2009), pp.225-226.

<sup>48</sup> Virginia.Held (2006), p.70.

<sup>49</sup> 田中朋弘 (2012), 「正義・ケアリング・ビジネス」, 『ビ

ジネス倫理学読本』, 晃洋書房, pp.165-179.

<sup>50</sup> 品川哲彦 (2009), pp.227-228.

<sup>51</sup> Virginia.Held (2006), *The ETHICS of CARE – Personal, Political, and Global –*, Oxford university Press, p.69.

<sup>52</sup> Virginia.Held (2006), p.69, p.70.

<sup>53</sup> Virginia.Held (2006), p.71.

<sup>54</sup> Virginia.Held (2006), p.71.

<sup>55</sup> 品川哲彦 (2009), p.157.

<sup>56</sup> 品川哲彦 (2009), pp.228-231.

<sup>57</sup> 高橋はこのケア中心の倫理はギリガンなどの「ケアの倫理」とは区別している。

高橋隆雄 (2008), 『生命・環境・ケア－日本の生命倫理の可能性－』, 九州大学出版会, pp.189-190.

<sup>58</sup> 高橋隆雄 (2008), pp.190-192.

<sup>59</sup> 高橋隆雄 (2008), pp.205-206.

<sup>60</sup> 高橋隆雄 (2008), p.210.

<sup>61</sup> 高橋隆雄 (2008), pp.213-214.

<sup>62</sup> ギリガン (1986), p.240.

<sup>63</sup> 確かに専心や受容・共感によってケアの対象者の苦痛や不安を受け止め, 苦痛や不安を和らげることには貢献でき, それだけで解決する場合もあるが, それだけでケアが遂行できないことも多い。

<sup>64</sup> G.W.F. ヘーゲル, 長谷川宏訳 (1998), 『精神現象学』, 作品社, p.132.

<sup>65</sup> 苦野一徳 (2011), 『よい教育とはどのような教育か』, 講談社。

<sup>66</sup> 山梨八重子 (2013), 「学校教育におけるケア的かわりの再考－ケアと正義の視点からの養護教諭の存在意義－」, (熊本大学リポジトリ), pp.8-16.

<sup>67</sup> 高橋隆雄 (2008), p.224.